



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

151



六月三日

六月四日

國家圖書館出版社

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

151

第一五一冊目錄

昭和九年（一九三四）調查報告（第三十一期生）

興安東分省莫力達瓦旗調查

興安東分省莫力達瓦旗調查

辻武雄

淺野德太郎

富岡康

第十九卷

.....

一

黑龍江省龍鎮縣調查

黑龍江省龍鎮縣調查

森岡昌利

吉田幸一

第二十卷第一編

.....

七五

黑龍江省德都縣調查

黑龍江省德都縣調查

森岡昌利

吉田幸一

第二十卷第二編

.....

一二一

湯原縣調查

湯原縣調查

中川義信

第二十一卷第一編

.....

一七三

滿洲炭礦株式會社調查

滿洲炭礦株式會社調查 小森藤雄 中川義信

第二十一卷第二編 二四一

黑龍江省林甸縣事情

黑龍江省林甸縣情況 染矢春雄 萩野康治

第二十二卷第一編 三一七

黑龍江省依安縣事情

黑龍江省依安縣情況 染矢春雄 萩野康治

第二十二卷第二編 三六九

黑龍江省林甸縣、依安縣事情(其二)

黑龍江省林甸縣、依安縣情況(其二) 萩野康治

第二十二卷第三編 四二一

黑龍江省望奎縣調查

黑龍江省望奎縣調查 宮內信武 藤本俊策

第二十三卷 五〇三

興安東分省

莫力達瓦旗調查報告

第十九班

辻武雄

淺野德太郎

富岡康

目次

調査担当 及報告書担当

第一章

總説

第三章

人口

第二章 地勢 物産

第六章 家族

第七章 経済

武雄

第九章 厚生

第十章

社会 衛生 十二貨物金融機關

(度量衡及)

第八章 教育

第十一章

商業

浅野徳太郎

第十三章 布西見取圖

昭和九年度第三十一期生第二十八回調査報告書

卷一 興安東分省莫力達瓦旗調査

第一章 總説

五同文書館

は育々哈爾以北に於て古來より名ある土地なりしも、地域辺陲に從來殆ど調査等行はれたる事なし。新滿洲國建設せられ

は興安東分省莫力達瓦旗の旗公署所在地となれりし、

管轄官廳たる興安總署、東分省公署は種々の事務に繁忙なるもの如く、各地方の調査等未だ殆ど着手せられしものなし。

況や北邊に位する莫力達瓦旗に於てをや。よは吾人か上述各官廳調査料等にて實見せしところなりとす。

布面に從來日本人の入り来りしものは五指を屈するに難かるべく、現在漸く派遣せられて任にあむ警務、警備指導官等も僅に五、四、此地に來りしに過ぎず。旗公署には亦た他県、他旗に見る如き日系官員を奉官の着任を見ず。

当地の住民の多休たる蒙古人も亦た新官制に慣れず、知識程度

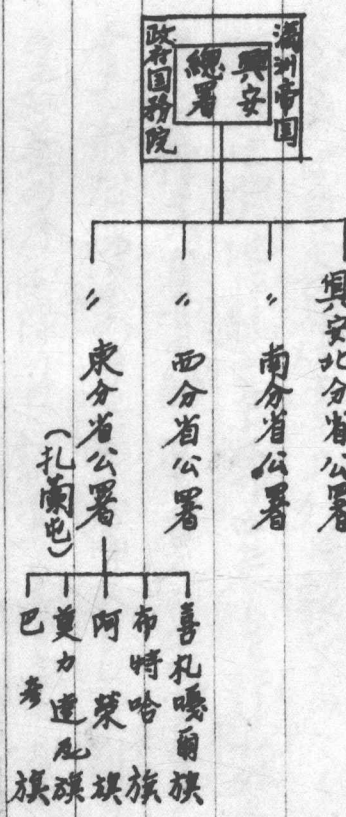
低く、且つ完全な多言語を諳し得るものは少く、急情の氣令存して
以て是に談ず可からず。

右の如き地方に足を留めし者等の調査は誠に困難多極のたり。

食事は吾々自炊するも外に頼むものなく交通は徒歩か騎馬により
調査は實地に就き東奔西走して行ふ外なかりし次第なりとす。

幸に種々の方面の助力と吾人の些少なる努力を以て完成せる報告
書も亦た種々の遺漏不備ありしを計られず。然したる吾人の努力
の最善の及ぶ限りは調査を終らざるなりしことを断言す。

莫力達瓦旗は 大同二年七月十二日公佈の區域劃定による興安東分省の一
 旗にして、旗長を額爾德孟額と云ふ旗公署を布西に置く。その行政管轄
 は大同元年三月九日公佈の官制に足り圖示すれば次の如し。



滿洲國建國以前にありては旗とは清朝政府の創始に成る行政區劃上の獨立
 單位にして 現在の東分省所轄の各旗は事変前は西布特哈八旗（正白旗、
 正黃旗、相黃旗、以上ホル旗、正紅旗、相白旗、相紅旗、正藍旗、相藍旗、
 ソン旗）として蒙古旗を編成して成れるものにして、尚や現在の巴彥旗、阿榮旗
 莫力達瓦旗の三旗は地域上 布西果として黑龍江省政府の管轄下にありし

ものなり。即ち従前に於ける旗とは清朝政府がカホール・ロン等の異族をその勢力下に統一し且つこれらの懷柔を計らん爲に、滿洲人の旗に則り編成せるものにして、この旗に對し清朝より旗地及官地を旗人に分配し、總管をして各旗を統轄せしめ、旗の境界は大むお山河を以て山河の目標となす可きものなり時は鄂博を堆きて之を表し、各旗濫りに境界を越えて遊牧するが如きを原則とせざる意を有せしものなり。滿洲國官制による旗は單に興安省内の行政區劃の便宜の爲に夫々地域を劃し旗と名付けしものにして、他省に於ける縣と異ることなし。只従来の慣習上県と呼ばれて旗と稱せしに過ぎず。

莫力達瓦旗公署の行政上の區劃として、本旗は縣更に五區に分たる。

旗公署の組織左の如し。



警務科

教育課
警務課
司法課

尚實際上の警務事務は布由札蘭也警察司直屬の警察署專ら之を司る。
警備軍として東分省警備軍直轄の第二團第三隊が布西に駐也す。布特哈司
令部の統制下に屬し兵數蒙古兵三百名編成は三個騎兵大隊及一歩兵大隊なり。

第三章 地勢

概況

大興安嶺山脉の岐脈波及して殆ど波狀体をなせる傾斜緩慢なる山岳は黒龍江省と興安東分省との省境を劃せる嫩江運蜿蜒として起伏連亘し之れが山陝低地を縫ひて大興安嶺の分水界より源を發せる諾敏河は北より南に向けて貫流し途中畢拉河大得子匡河西瓦爾圖等の諸支流及阿榮旗より注流せる革泥河と合して莫利達瓦旗を西北より東南に截断せる形にて布西の南方に於て嫩江に合流す。その流域約三百二十支里間の堆積泥沙は下流に於て肥沃廣渺たる布西平原を形成し、中流地帯に於ける畢拉河と諾敏河との合流地區附近一帯を除く外下流より大興安嶺の水源地に到る左右岸交互の廣潤なる流域は平原濕地々帶を形成するに至り。

山脈

布西の北方尼爾吉山より發し起伏して諾敏河東岸より南河

に連亘せる山岳は如奇屯附近迄は丘陵狀にして漸次北進するに
及び標高を加ふるも山容は傾斜緩慢にして目測百米乃至百五十米
を最高とす。諾敏河上流東岸ニク札克奇山に至りて漸く山容を整
へ險しきを加ふ。

畢拉河之畔は附近の群山を壓して聳ゆる秃胡盧山（休火山）
標高八四五一あり。畢拉河と諾敏河の合流地帯の左岸には銳角
峻險なる断崖山岳が重疊するも上流に及ぶ緩なる波狀態の山脈
化し大興安嶺に及ぶ途中過る烏回山嶺の峻險なる山岳を見る
のみ。

諾敏河右岸と革泥河左岸に當る一帯は隆起山嶺緩なる
傾斜を以て兩河の合流点より西北に次第に高し。

各山脈に属する山岳をあぐれば左の如し。

尼爾吉山脉

尼爾吉山

切々仍山

加爾冬山

札克奇山

烏回山脈

烏回山

伊斯克山

薩起山脈

薩起山

加爾敦山

臥爾會山

沃洛在山

河川

嫩江

嫩江は又嫩尼沐連と呼ぶ。松花江の一支流としての嫩江は江流の延長大なるも、及其の支流流河川と相俟つて灌溉流域の大なるに於て松花江支流中第一位にあり。嫩江の水源は北緯五十一度東經百二十三度附近又墨爾根の東北六五九支里即ち二五、七哩の処に位し河口は北緯四十五度二分の一東經百二十四度四分の三の附近に位す。

莫利達瓦旗に沿ふ部分は北は阿彥沁（安彥淺）の稍上流より南は諾敏河との合流点に至る間なり。

阿彥沁附近より郭泥附近に至る迄江流の右岸は主として連岳河面に迫り左岸は廣茫約〇五哩内外の河谷を形成す。郭泥より右岸は尙登子科に至る迄山岳河岸より退去することなく隨処に迫る。左岸は引續き小河谷を形成し途中西

及爾圖附近に於て山岳河面に迫る。雖も再び河谷展開し
次で右岸又小河谷を~~形成~~形成しつゝ、布西背後の丘岳を
巡つて布西埠頭に到る。以上の江区は概して河床も整ひ、
河岸の部落亦割合に蟬集し舟筏の便は夏期を通じて可能
なりとす。

布西より下流に至るや今迄左程の氾濫江区を認めざりし歟江は
恰もや水門より奔流するかの如き湍さを以て溢流す。布西より
江流は約〇・五哩にして左折し左岸の阿拉哈沁埠頭を経て
更に右折し札屯莫爾沁に至る。これも右岸の部落大莫爾沁
小莫爾沁を経て南流す。

布西より一六・六哩の右岸に於て諾敏河會流し更に〇・五哩の
下流に於てなるより訥謨爾河注ぐあり。

布西より齊々哈爾迄の江流距離は一五九・三九哩なり。